

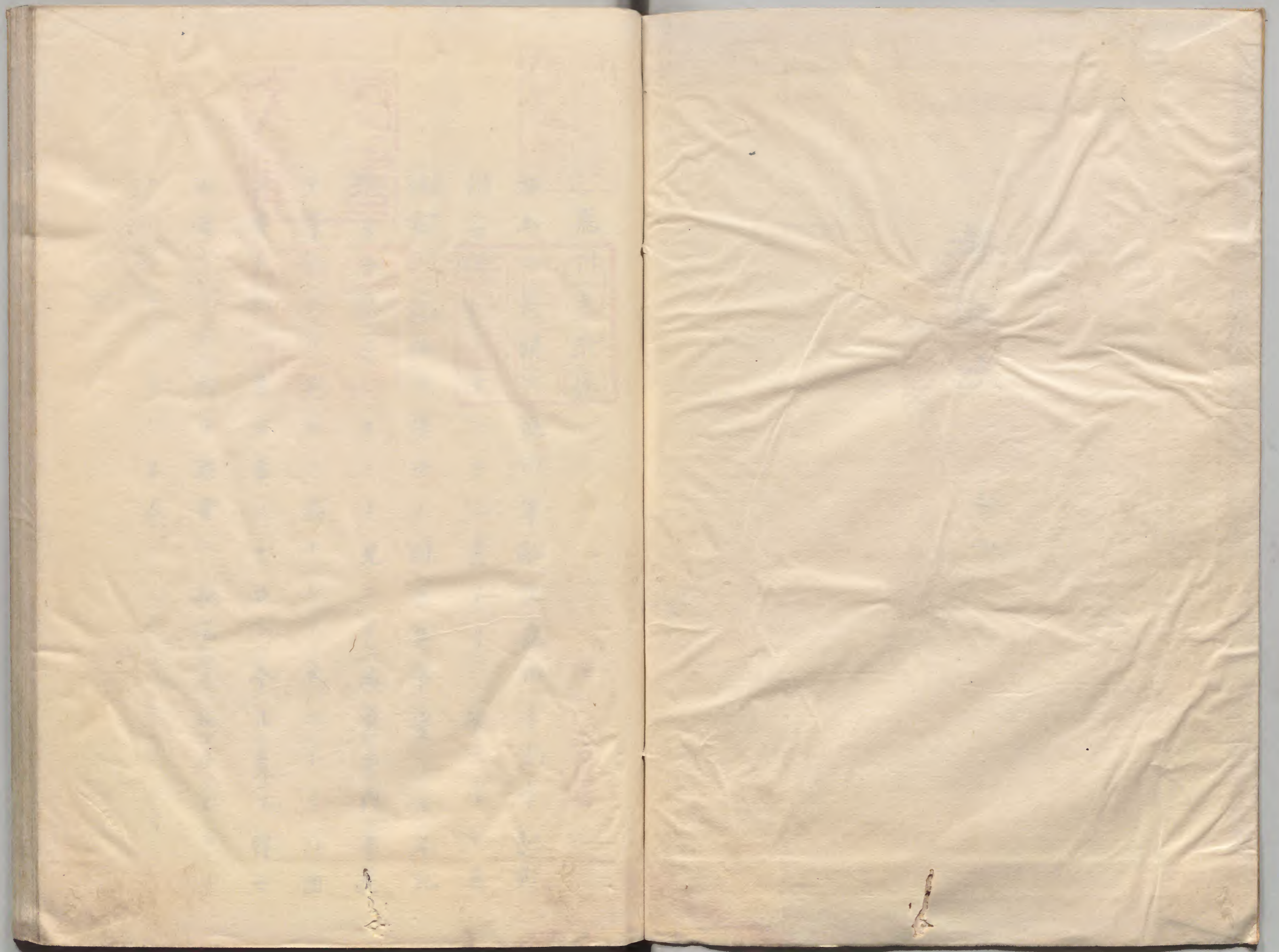
飛州志 附錄

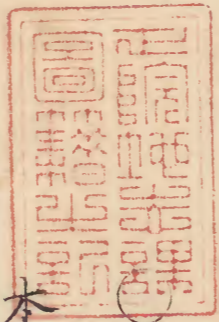
十二

庫文閣内		
五 函	元 一 天 五	和 書
架	冊	號
七	二	五
止(二十本)		

内閣文庫		
番號	和	29165
冊數	12 (12)	
函號	174	203







飛

州

三



州志附錄

民間

澤記書

内一〇九四四號

飛州軍亂記飛州千光寺記飛

州三澤記書按スルニ是

往古ノ説話ヲ後世ノ國民其事實ヲモ不レ亂

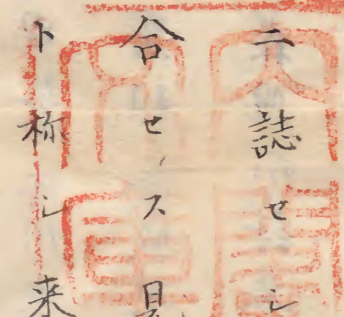
狼リニ誌セシモノト見エテ来由年代等誌

夕符合セ不見ルニ益ナシト云ヘトモ此國

ノ書ト稱シ来ル事久シ故ニ今止莫ヲ得ナ

ルモノヲハ聊カ頭書ニ記シテ知ラシムル

ノ三詳ナルニハ不及



小次目

- 一 飛州諸將之事
- 一 飛州江馬家之事
- 一 武田勢飛州攻入之事
- 一 小鷹利落城之事
- 一 金森飛州討入之事
- 一 金森所々城築之事
- 一 飛州千光寺記
- 一 塩屋筑前守討死之事
- 一 飛驒國司滅亡之事
- 一 江馬家滅亡之事
- 一 三木上洛之事
- 一 三木防戰松倉落城之事
- 一 金森戰功并法印家督之事
- 一 同三澤記

○飛州軍覽記

○飛州諸將之事

内一〇九四號

往昔人皇七十八代二條院ノ御宇平相國
 清盛ノ家臣飛驒三郎左衛門尉景綱當國ヲ
 出レヨリ以來平家西海ニ亡ヒ源氏モイ
 ヲ太平ヲ得ス國士長ク出仕ヲ止メテ州内
 於テ主タル人無キカ如ク國士在ク所々
 蜂起シ巴々ニ其威ヲ振ヒ強キモノハ弥
 ツヨク弱キモノハ益弱ク民ノムサホリ仁
 義ノミチヲサキ或治ノ或ハ乱レ年々合戰



按スルニ國統成ハ其家
 系ト係スルモノヲ見ル
 其七江州藤原家ノ源也
 福山氏ハ本氏中將信州
 和也ハ本氏ハ本上ノ人
 木姓氏ハ詳加氏ハ姓氏
 未由未考江馬氏ハ平姓
 也廣瀬氏ハ本氏未詳
 詳廣瀬氏ハ本氏未詳
 小島氏ハ藤原氏姓也
 島家ハ餘前トテ小
 島氏ハ本氏ハ本上ノ人
 フリ各本士在名ナ
 リ藤原氏ハ姓氏未
 由未詳委ク名城部
 二載クリ其稱下
 併セ可考

止々事ナシ平家亡クテ後源家三代北條モ
 九代ニシテ悉ク亡ビタノ其後因々ノ諸士
 所々ニ起リテ聖治ノ澤ヲ蒙ラズ義貞尊氏
 モ合戦シテ天下久ク静カナラズ其後飛州
 ニ於テ兵威ヲ振フ者少カラズ先ッ益田郡
 櫻洞ノ城ニハ宇多源氏ノ後胤三木右京大夫
 夫自綱後大野郡松倉ノ城ニ住ル大野郡鍋
 山ノ城ニハ鍋山豊後守安室同白川ノ城ニ
 ハ内島兵庫頭氏理家臣河尻備中守氏信山
 下豊前守定安同山下ノ城ニ一宮右衛門大

夫國綱同江名子ノ城ニ畑六郎右衛門尉休
 高荒城郡為原ニ桓武帝ノ後胤江馬左馬頭
 小四郎時盛同廣瀬高堂ノ城ニハ利仁將軍
 ノ後胤廣瀬山城守宗城家臣河尻右近田中
 與三右衛門一族堀越前守同杉寄ノ城ニハ
 小島左近將監時光同小鷹利ノ城ニハ妙小
 路ノ宰相藤原頼纒入道明山家臣牛丸又右
 衛門重頼同甲島ノ城ニハ向右近大夫同古
 川蛤ノ城ニハ塩屋筑前守等也

○塩屋筑前守討死之事

按ハルニ塩屋氏未由
未詳今ハ木上ノ氏而
持スル処ノ三本自鄒文
書ニ宛州塩屋筑前守
殿ト記ス事アリ然レハ
甲陽軍鑑ニ飛騨
十田ニテ筑前ト由
ツ日本治乱記ニ飛騨
國ノ任人自屋筑前守
殺良トアリ西ノ未詳

按スルニ此江馬輝盛天正
四年上杉ト戦ヒモト
ア此相連也江馬家ノ
滅ビ天正十年也今世
本ハ氏所持スル処
天正五年同六年ノ
文各アリ

塩屋筑前守ハ越中國ニ討入テ新川郡ノ攻
取猿倉ノ城ニ居住シ越後ノ上杉入道謙信
ニ屬ビリ天正四年三月上杉越中ニ入テ所
々ニ働キ塩屋筑前守ヲ先鋒トシテ飛騨國
ヘ討入給ノ此時ニ於テ江馬輝盛勢盡テ亡
フ小鷹利ノ城主國司姉小路頼繩朝臣卒云
ヒラル其子若年タルニヨソテ家臣牛丸亦太
郎大将分リリ成長ノ後姉小路尹繩朝臣ト
云其跡ヲ家臣牛丸又太郎平重親其子葦人
親吉其子又太郎經親迄三代小鷹利ノ城主

夕リ其頃信長謙信ノ旗下ニ附タル越中加
賀ノ面々互ニ合戦止事ナレ仍テ謙信ヨリ
兵ヲ賀州ヘ進ノラルニ依テ織田信長公
ヨリ軍勢ヲ向ラル軍將前田亦左衛門利家
柴田伊賀守勝豊佐久間玄蕃允盛正金森五
郎八長近原彦次郎師頼等加州宮ノ腰ニテ
對陣アリシカ其後又越中ノ諸將ニ謙信ヨ
リ加勢ニ給ヒケレト終ニ猿倉落城シ筑前
守討死ス

○飛州江馬家之事

按スルニ飛州江馬家
来由未詳其時政ノ長
男江間小四郎義時ア
ノ江間江馬曰稱スルカ
故ニ漢世此説アリ
タルカ日本古今記
能登國ノ時江馬常陸
守時宜ト云人アリ尚
可考

抑當國江間家ノ先祖ヲ尋ルニ桓武天皇ノ後
亂平相國清盛ノ舍弟修理大夫經盛卿ノ子ナ
リ平家西海ニ沉亡セシヨリ以來彼妻力ナク孤
子ヲイタキテ身ノ置所ナキ折カラ北條ノ
時正ニカタラヒ彼孤子ヲ養育ス日ヲ重子
月ヲコエテ成長シ江馬小四郎輝經ト名乗
ル時正ノ長子義時トイツノ比ノリカ不和
成シカ後義時ニアクテナニトハカル義
時早ク其色ヲサトリテ頼家公ノ仰ナリト
偽リ則輝經ヲ飛驒國ニ流シ遣シタリ然ル

ニ高原ト云所ニ代々住シ子孫相續ス高原
ニ在城シテ高原郷ノ領ス清盛ノ重寶小鳥
ノ太刀一文字ノ薙刀青葉ノ笛等ヲ持傳テ
家宝トス其後輝經ヨリ十代ニシテ左馬頭
時盛其子常陸介經盛ニ至リテ武威ヲ振越
中ニ討入り新川郡ヲ切取ルト也
○飛驒國司滅亡之事
國司姊小路頼綱朝臣ハ小鷹利ノ城主也先
祖代々公家ヨリ出テ當國ノ國司タリ建武
年中後醍醐大皇南朝ニ皇居ノ時當州ノ國

按之肥前國司伊弉
頼朝八南朝ヨリ補任
國司トアレトモ頼朝
并ニ四代目伊弉トモ
ニ好小路家系ニ無レ
不審ナリ南朝記傳ニ
云ク應永十八年七
月廿七日肥前國司伊
弉伊弉ヲ誅スル
リ是テアヤマリ傳フ
ルモノカ古城部姉小
路家譜系圖ヲ符ト考
フニ是利家ハ
持時トナルニ小笠原
持氏トナルハ誤リナリ
持長トナル

司ニ定メ給フ四代目ニシテ參議藤原伊弉
朝臣ハ小島ノ城ニ居タリ此國司一國ヲ治
テ繁榮ナレトモ南朝ノ宮方日々ニ衰テ足
利尊氏天下ヲ奪フ然レトモイマタ一統セ
ス依之暫クハ無夏ナリシト云ヘ氏義滿ノ
時ニ至テ飛驒征伐有ヘシト朝倉左衛門佐
甲斐小太郎兩大將ニテ大野郡ヨリ發向ス
郡上穴間ヲ經テ京極近江守越中笹津ヨリ
小笠原信濃守持氏討入レカハ伊弉國中ノ
武士ヲ催シレキタカフトイヘトモ終

運命尽テ應永十八年八月十三日小島落
城ニテ國司伊弉ヲハ朝倉ノ家人井上新兵
衛討之凡國司四代年數八十三年也

武田勢飛州攻入之事

天下猶亦乱レテ信長尾陽ニ起リ謙信越後
ニ働キ信玄ハ甲斐ニ霸タリ飛州其間ニハ
サマレテ所々在々ニ鉾ヲ爭ヒ合戦止ム事
ヲ得ス其頃益田郡櫻洞ノ城主江州佐々木
ノスヘクルト云其子孫ニ三水大和守直頼
其子右兵衛督良頼入道雲山其子右京大夫

杖入ル永禄七年甲州
 武田家より飛州千光寺ヲ
 攻メ事ヲ斷リ甲陽軍鑑云
 三郎兵衛利馬場三人ヲ
 以テ飛州守リ之ヲ籠メ
 守リ馬場守リ之ヲ籠メ
 飛州ノ國ノ押入又永禄
 七年四月飯富三郎
 兵衛一頭ヲ以テ御キ四月
 中尾ノ半回ノ上江馬
 場守守ト云侍大將降
 参三郎兵衛甲州ノ名達
 タリトアリ此時千光寺
 ヲ攻メ内通シテ三木ヲ
 攻メ事未定又飯富
 八有故永禄八年山縣
 下致ノリ

自網入道休庵代々當國ヲ領ス然ルニ廣瀬
 高堂ノ城主山城守宗城ト不和ニシテ相互
 ニ彼ヲ亡ホシ其跡ヲ奪ヒ國ヲ治メントハ
 カル山城守宗城甲州へ使者ヲ以テ信玄ニ
 通シ三木ヲ初メ飛城ノ諸將ヲ亡ホサント
 約ス故ニ永禄七年七月十八日信玄ヨリ山
 縣ヲ飛州小八賀郷千光寺へサレムケ當山
 十九院ノ衆徒三木ヲ背ヒテ宗城ニ刀ヲ合
 スヘキノ趣ヲ申送ルトイヘトモ十九院ノ
 衆徒等聊兼引セス鳥趣山ノ峯々ニ要害ヲ

杖入ル永禄七年甲州
 武田家より飛州千光寺ヲ
 攻メ事ヲ斷リ甲陽軍鑑云
 三郎兵衛利馬場三人ヲ
 以テ飛州守リ之ヲ籠メ
 守リ馬場守リ之ヲ籠メ
 飛州ノ國ノ押入又永禄
 七年四月飯富三郎
 兵衛一頭ヲ以テ御キ四月
 中尾ノ半回ノ上江馬
 場守守ト云侍大將降
 参三郎兵衛甲州ノ名達
 タリトアリ此時千光寺
 ヲ攻メ内通シテ三木ヲ
 攻メ事未定又飯富
 八有故永禄八年山縣
 下致ノリ

搦ハ楯籠テ松倉へ加勢ヲ乞トイヘトモ三
 木如何思ヒケン一騎モ加勢ヲ出サスサレ
 トモ衆徒ハ夏トモセス中ニモ実光坊ノ玄
 海普門院ノ亮輝吉祥院ノ尊順説法院不動
 院蓮華坊ノ阿舎梨カ射出ス矢先打出ス鏃
 炮ニ猶武具ヒタマラハコソサレトモ寄手
 ハ名アル大將無二無三ニ攻ケル間衆徒命
 ヲ捨テ防キ戦トハイヘトモ今ハ詮方ナク
 終ニ落城シテ殘トク等思ヒノニ落行ケ
 ル武田方勝利ヲ得テ一山ノ院々ニ火ヲ放

テハ時ノ兵火ニ亡ヒ失ニケル山縣三郎兵
衛弥勇威ヲ振ヒテ三木ノ城ヲモ責落サン
トスル處ニ越後ノ謙信又信州川中島出張
ノ由告来リシカハ山縣早々兵ヲ引テ甲州
ニ歸リケル

○江馬家滅亡之事

然ル處ニ江間常陸介輝盛ハ越中新川ノ領
分中地山城ヲ構テ譜代ノ家老神代川上和
仁等ヲ入置其身ハ甲斐ノ信玄ニ仕ヘアリ
シニ謙信方ヨリ中地山へ押掛ケ攻ケレハ

川上神代和仁等タマラスニテ方々へ逃落
タリ輝盛甲州ニテ此有様ヲ聞弥信玄ニツ
カヘ其上高原ノ圓城寺ハ舍弟ナレハ甲州
ニ迎テ信玄へ人質ニ渡シケレハ信玄是ヲ
還俗サセテ江馬右馬允ト名乗ラセテ手勢ヲ
預ケ幕下ノ先鋒トシテ既ニ飛驒國退治セ
ニト極々三木自縊是ヲ聞大ヤニ驚キ國中
ノ諸將ヲ觸カタテテ手勢一千餘人引卒
ス廣瀬山城守モ此時ハ三木ニ縁ヲ組シ故
休菴ニ加ル江馬常陸介手勢三百餘騎ニ越

按スニ江馬輝盛三木
ト戦ヒ討死トアルハ
リト見エケリ江馬ハ
寄ノ城ニ押寄小島
時老ト戦フ討死シ
リ古城部杉寄ノ城
シノ条下ト稱見ルハ

中落去ノ家臣和仁川上神代等ノ士卒ヲ引
辛ニテ相加レ故ニ高原ヲ出馬シテ荒城ニ
討出テ責戦ヲ三木ノ勢并ニ廣瀬牛丸大勢
ナリトイヘ共輝盛物ノカストモセス手イ
タク相戦ヒ自身一文字ノ大薙刀ヲ以テ大
勢ヲ切崩シ追立々勝ニ乗テ戦ヒケル処ニ
小島時光三木方ニ加勢シ寄来ル故ニサシ
モノ江馬モ戦ヒ疲レ八日町ト云所ノ橋ノ
邊ニ立ヤスノヒ居ル所ニ牛丸亦太郎生
年十七歳唯一騎カケ乘リ切テカ、ル輝盛

彼薙刀ヲ取直シタリシカ運命是マテトヤ
思ヒケニ薙刀ヲ打捨牛丸ヲ呼ニテ汝大将
ノ首ヲ取ル法ヲ知タルヤトイフテ首ヲ指
ノヘテ牛丸ニ討セケリ牛丸首ヲ得テ立去
リシカハ江馬ノ家臣川上左衛門尉同縫殿
介和仁經氏神代其以下ノ者トモ走歸リ此
有様ヲミテ同枕ニ討死スアハレムヘシ先
祖經ヨリ数代ヲ箭ニ携リテ誓ヲ取ル家
ノ一時ニ亡ヒ失ニ事痛ハシキ有様ナリ輝
盛ノ骸ハ八日町ノ橋ノ邊トニ塚トナス代

々ノ領主タルニヨリテ尊敬シテ御墳ト云
長刀小牛丸取ツテ後ニ金森ニ進上スルト
也

○小鷹利落城之事

カクテ三木休庵ハ松倉山ニ新ニ城ヲ築キ
テ居住ス天正八年廣瀬山城守宗城ハ牛丸
亦太郎トハ兼テ親切ナリシトモ三木ト
縁ヲ組シ故牛丸ヲ亡シ前々国司ノ一跡ヲ
奪ヒトラニト謀リ家臣磯村長十郎廣瀬助
之進ヲ兩大將トシテ二百人ノ軍兵ヲ添テ

小鷹利ニ差向ケル是ヲ聞テ牛丸亦太郎其
身ハ城ニ有ナカラ伯父後藤帶刀重元牛丸

左馬亮重清後備前守牛丸沼郎右衛門親次等

百餘人ヲ相添テ古川ニ於テ一戦ス双方對

々ニテ引退ク翌年天正九年和睦シテ廣瀬

牛丸シハラク無事ナリケルカ次第ニ牛丸

歳衰ヘタルユヘ又天正十年正月廿七日廣

瀬三木兩旗ニテ大軍ヲ催シ小鷹利ニ發向

スル牛丸又右衛門城中無勢ニシテ叶カタ

クヤ思ヒケニ其夜城中ニ篝火ヲ燒捨テ牛

按スルニ牛丸一黨ノ中
牛丸備前守重清常州
佐竹家ニ任テ云ハ藤原
行佐家ニ任テ云ハ藤原
義三云飛騨國司輝山路家
族小幡利胤輝守藤原
光政天正年中飛騨ヲ去
テ常州ニ来リ佐竹教宣
ニ任テ備前右近向飛騨守
ト云是也

九又右衛門渡辺主水同筑前牛丸次郎右衛門
同對馬同左馬亮後藤帶刀山賀新兵衛彼
是五十餘人城中ヲ出テ越中へ落行ケル三
木廣瀬急ニ追掛シカハ角川ト云所ニテ後
藤重元返シ合口散々ニ相戦ヒ行年六十二
歳終ニ戦死ヲシタリケル其隙ニ亦右衛
門ヲハレノ其外ノ輩三十四人越中水無瀬
通リヲシテ落行ケルカ越中富山人城主佐
々陸奥守ニ責出サレ夫ヨリ越前へ落ノヒ
越前青瀧山人城主金森五郎八長迄ヲ頼ム

按スルニ三木休庵先國
司ノ家名ヲ推テ大納
言ニ任シタリト云事未
詳後人撰リ記スモ
ノナルヘシ

伯父牛丸左馬亮ハ佐々成正ニ降参シ牛丸
備前守重清改々後ハ常州ニ行佐竹家ニ仕
フト云
○三木上洛之事
斯テ三木休庵國中ニ威ヲ振ヒ國司ノ一跡
ヲ奪ヒ上洛シテ國司号ヲ給リ帰國ノ節右
兵衛督良頼ノ望ニヨツテ先祖累代ノ江州
宇多源氏ヲ捨テ先國司ノ家名ヲ經妹小路
大納言藤原ノ自綱入道久安ト号ス舍弟右
衛門督顯綱ハ鍋山豊後守カ家督ヲウハヒ

鍋山豊後守ト名乗ル然レトモ久安カ悪心
ヲウトミケニ頭細ハ左衛門督信綱廣瀬山
城守等ニ示合松倉ノ久安ニ反逆ス久安是
ヲ聞大キニ立腹シテ信綱ヲハ松倉ヘタハ
カリヨセ殺害シ鍋山頭細ヲハ長瀬甚平ニ
申合メ謀書ヲ作テ鍋山ヘ差遣スソノ書面
ニ讀カタキ所有リ顯綱コレハイカント甚
平ニ問フ甚平其時近ク立ヨリミルフリノ
テ頭細ヲ切殺ス頭細ノ妻女薙刀ノ鞘ヲハ
ツシ大手マテハ追掛シカトモイタハシキ

カナ女性ノ身叶ハスニテムク帰ラル
兼テ約束ノ一味ヤ有ケニ城ノ後ヨリ火ヲ
放テ魔煙一時ニ焼ノホルニヨリシハシモ
コテヘス落城セリ自是鍋山ノ一跡モ三木
持分タリ久安猶モ廣瀬ヲ亡サニトタクム
ニヨツテ廣瀬山城守宗城同兵庫頭久安ニ
敵討カレヒカメノヤ思ヒケニ降参シテ城
ヲアケ渡ス然レトモ是ヲユルサスシテ兩
人共ニ討取タリ誠ニ弟ヲ討甥ノ殺シ城ヲ
明降参ニ出シ廣瀬ヲ討取事無道甚シキ仕

形ナリ其後ハ久安高堂ノ城ニツツリ次男
秀綱ニ家督ヲ譲リ松倉ニ籠ラセ三男元頼
ハ小島時光ノ家ヲ繼テ於寄ノ城ニアリ國
中三木カ大刀影ニ伏セスト云所ナレ
○金森飛州討入之事
天正三年信長公ヨリ拜領シテ越前國大野
郡中ノ領主金森五郎八長進入道法印此節
ハ青龍山ノ城ニ居住セラル飛驒國中悉ク
三木カ為ニ責亡サレ民モツカレ國中甚乱
レタレヨシ聞及ハレシカハヒソカニ案内

撰スルニ浪人川尻
ハ備中守氏信ニテ
ハ無シ氏信カ子川尻
勤平金森ニ任テ天正
五年法印ヨリ川尻勤平
ニ授ル知行ノ目録川尻
カニ添冊持セリ

者ヲ求メ飛驒ノ繪圖ヲ以テ軍議昼夜怠リ
ナレ然ル処ニ鍋山豊後守カ弟右進大夫久
安ニ責落サレ青龍山ノ城下ニ来ル是ノ
ナラス白川内ケ島兵庫頭氏理ノ家臣河尻
備中守氏信一家ノ恨ヲ蒙牢浪シテ大野ニ
来ル長進是ヲ進付テ郡上遠藤左馬亮慶隆
大隅守胤基ニ通シ加勢ヲ乞ヒ味方ニナシ
則郡上長瀧ト云フ所ニ小城ヲ構テ飛驒
ノ押トシテ鍋山左進川尻備中ヲ入置所ニ
飛州ノ浪人江馬右馬介ヲハシメ氏族并ニ

按スルニ此時信長信忠御
父子也信長永祿寺信忠
三奈々城ニ於テ生害タ
リ京都ノ武將上総介
トテトアルハ誤ナリ

按スルニ尾州征伐ニ奉命
河風土記ニ天正十年信長
長生寺ノ御テラトアリ信
命也又長子長屋喜三ハ
細川一統ノ外孫長屋喜三ハ
カ子也則金森出雲守可
重ト稱ス也

牛九又右衛門等時ヲ得夕リト悦ニテ飛驒
ノ御先手仕ラニト聞傳次第ニハセクハ
ル然所ニ天正十年六月二日於京都武將織
田上総介殿家臣明智日向守光秀カ為ニ害
セラレ給フヨシ長近ノ嫡子金森忠次郎長
則モ同日二條ノ城ニ於テ忠死ス此時越中
富山ノ城主佐々陸奥守飛州高堂ノ城主三
木久安心ヲ合セ秀吉ノ下知ニシクカハス
是ニ依テ天正十三年ノ春羽柴筑前守秀吉
越中富山へ御馬ヲ出サレ佐々成正ヲ攻給

フ陸奥守終ニ討負秀吉ノ軍門ニ降ル此時
ノ軍ニ金森長近御味方ニ於テ軍功他ニ異
ルカ故ニ秀吉云御悦喜上意サマサマ也七
月七日富山ヨリ四里飛驒ノ方ニ筈津トイ
フ所へ御着座有リ其川向ニ一村ノ在家ヲ
リ何トソ放火ビヨトノ仰有ニ処ニ長近ノ
馬廻リ長屋喜三可重唯一人馬上十カヲニ
川ヲ乗越エ在家ニ火ヲ掛焼捨テ立歸ル牛
九又右衛門政親モ佐々責ノ軍功ニヨツテ
太閤ヨリ御感アリテ猶戦功ヲ可抽旨仰被

下ケル御歸陳ノ御長近ハ飛州征伐ノ仰
付ラレ手拓次第ニ伐取リテ知行スハキ旨
仰出サレケルトナリ是ニコソテ天正十三
乙酉年八月上旬金森法印飛州へ討入長近
此時六十二歳也則長屋喜三可重ヲ養子ト
ス歳二十八兩大將ニ手ニ別レ進發スリ法
印ノ方ニハ江馬右馬亮鍋山左近大夫石徹
白彦右衛門川尻備中守牛丸又右衛門等飛
州案内者ノ先手トシテ相隨人々ニハ岩
田弥助田島勝太遠藤宇右衛門根尾庄右衛

按スニ此時天正十三年
加勢森勝下ハ然
也勝藏ハ森武藏守長
可ト稱ス天正十二年
甲申四月五日濃州小牧
ニ於テ戦スナリ

門大塚權石衛門田能村源治加勢ニハ森勝
歳遠藤左馬介廣隆ノハレノ凡一万餘騎ニ
モ及フハキ越中長谷ヲ經テ飛州ニ屋ニ掛
リテ討入ル可重ノ方ニハ田島太郎八篠保
太郎左衛門長屋甚歳遠藤西脇大塚日根野
川合中島松山時枝山蔵葛西矢野馬場阿波
賀山内等其勢千五百餘人郡上ヨリ野々候
口ヲ經テ入ル所ニ下山龍ヶ峯數分所ニ三
木軍勢短タリケレハ金森大軍ト云ヒ容易
討入カタク郡上和良通り下原ヨリ討入リ

ケル也

○三木防戦松倉落城之事

斯テ三木方ニハ金森討入ノヨリ聞及ヒ籠
城兵糧ノ支度ヲコタラス因中ノ武士ヲ召
集ノテ其身ハ高堂ノ城ニ楯籠ル味方ニ来
ル者共ニハ小島時光同元頼向右近大夫畑
六郎右衛門廣瀬織部其外野武士ノ類ヒ其
数ヲシラス楯籠ル然ルニ金森法印ハ高堂
ノ城ノ追手ニ押寄合戦ヲ初メニトヌ加勢
ノ輩ハ廣瀬川原ニ備テ立ツ然ルニ加勢方

ヨリ金森ノ陣ニ使テ立テ各取掛ケヘキマ

トアリレカトモ夫ニハ及フマシキノヨレ

返答有テ影テ兵ヲ進メ自身鎧ヲ取テ攻戦

ヒ追結即時ニ城ニ乗入シルハ城兵防ニ力

盡テ久安甲ヲ脱キ降ヲ乞ヒ京都ノ方ヘソ



落行ケリヲテ可重ハ松倉ノ麓ニ陣ヲ張既

取掛ラニトヒレ處ニ高堂ニテ敗軍セレ

三木ノ殘黨松倉ノ城ニハセクハル城將

秀綱是ニ少シ力ヲ得テ堅ク守ルトイヘト

モ長近又寄手ニ相加リヌ然ニ可重ノ陣取

シアタリノ斥侯レテ走廻ル者アリ松倉方
ノ足輕大将畑某ト云フ者ナリ金ノ莖ノ指
物ニ月毛ノ馬ニ打乘リテ進退誠ニ適ナリ
敵味方ノモトトモシハウク見物レテ居タ
リシヲ可重大キニイカツテ我陣中ニ人ナ
キカエトシ誰カアル彼ヲ計取參ルヘシト
イフ言葉ノ下ヨリモ黒鹿毛ノ馬ニ乗タル
武者一騎カケ出シ彼者ニ向テ言葉ヲカケ
手綱ヲ繰テ近ツキ寄ル敵モバカテ馬ノ頭
ヲ引返シ互ニ大太刀ヲスキモツテ無二無

三ニ切結ノサテニ勝負モ見エサル処ニ駒
ヲナテヘテ落タリケルアハヤト見ルニ黒
鹿毛ノ馬ニ乗タル或者上ニナツテ首ヲト
リテナレク莖ノ指物ヲトリシウヘ敵ノ馬
ニ乗カヘテ可重ノ本陣ニ立歸ル松倉勢是
ヲ見テ討留シト切テカレハ金森方ニハ
見テ討ロシト入乱レテ責戦ヒシカ金森方
其日ノ勝軍也彼首ニ金ノ莖ノ指物ヲ副テ
取レ兵ハ山藏殿頭ト云フ者ナリ法印父
子是ヲ感シ即時ニ知行六百石ニナレテ錦

陣羽織ヲ手ツカラ山蔵ニハ給ヒニケレ
去程ニ城中日々ニ戦ヒ疲レケル折ラニ後
ノ山上ヨリ放火起テ燃上ル城中ノ上下ア
ハテフタメキテ今ハヒニカクナク皆散々
ニ落行ケル是ハ法印兼テ計畧ヲ廻ラレ城
中ノ侍ニ藤瀬新蔵ト云フモノアリニ内
通有テ藤瀬返リ忠ヲシタル故ナリトノ聞
ユ久安降参ノ後京都ニ有テ天正十五年病
死ヒレト云リ秀綱ハ高原ノ方ヨリ信州ヲ
心サニ落行ケルカ信州大根川ト云フ所ニ

按ルニ小島時光三
木ニ加勢ニ高堂ニ城ニ
住ルハアリ又杉寄ノ
法印初メ古川郡ヲ伐シ
クカハ自置ニテ高堂ニ
大野郡移居ヲ致スレリ
杉寄ノ別古河ニアリ
最初ニ明道キ高堂ニ
籠ル終リ未詳其舎ニ
ノ姓名各終リテ知ラス

テ郷氏ノ手ニ掛リ鑊炮ニ打レテ死ヌト云
ノ此節小島時光同元頼ノ籠リタル杉寄ノ
城ニ没落シ又其外江名子畑六郎右衛門向
右迄大夫等ヲ初所々ノ城主皆法印ノ為ニ
責亡ホサレ一國平均ニ治メケル金森ノ武
勇ノ程タクヒナクコソ聞エケリサテ翌年
金森可重飛州ニ入部セラル益田口ヨリ入
ケル處ニ一宮右衛門大夫三宅邸士舟坂又
右衛門ト云フ有ニ申付下原ト云フ所ニテ
可重ヲ鑊炮ニテ子ラヒシカトモ可重カ運

ヤ強カリケニ立消シテ又右衛門生捕ラレ
然レトモ可重イカ、思ハレケシ命ヲタス
ケ置レシナリ其後三宅弥野心止スレテ因
中ノ殘黨テカタラヒ可重ヲ討取一ト一宮
ニテ待請ケルヲ可重ノ先手田島路大笹俣
太郎左衛門鎗ヲ以テ散々ニ突崩ス其日ノ
一番高名ナリ去ニヨツテ三宅命ヲ捨相戦
フト云ヘトモ終ニ打負テ討死ヲシタリ
ケル三澤ノ妻子其外殘黨皆梟首セラレ鍋
山ノ藪ニ首塚ヲ築成ケリ

○金森所々城築之事

翌年法印ハ蛤ノ城ニアリテ高山ニ新城ヲ
築キ遠藤宗兵衛ニ千五百石ノ知行ヲアタ
ヘ高山ノ城代トヒリ可重ハ古川ノ城ニ居
シ一万石ニテ部屋住分ナリ家老ニハ西脇
右近ヲ附置ル益田郡萩原ニモ城ヲ構ヘ美
濃岡上有知ノ住人タリシト云フナル佐藤
六左衛門當時金森家ニ販近セシヲ則城代
トシテコレヲ守ラシム太閤秀吉御在世ノ
間ハ法印伏見ニアリシカ御他界ノ後ハ京

按スニ佐藤六左衛門末
由未詳永祿三庚申年
今川義元尾州築向勢
ノ所ニ依藤六左衛門ト出ツ
其後金森ニ附庸セシト見
エタリ子孫ハ竹腰家ニア
リト云

都柳ノ馬場ニ居住セラレ専ラ忠勤ヲハケ
マシケルカ中ニモ去ル慶長五年關ヶ原御
陣ノ軍功ニヨツテ濃州上有知一万八千石
金田三千石都合二万千石ヲ御加増也此關
ヶ原御陣ノ時父子トモニ留守トリシ處ニ
長近ノ舍弟金森掃部介可憲石田方ニ有シ
カ金森ノ味方ニ附シトテ飛州ニ来ル可重
使者ヲ以テ御馬ヲ入テ候一戦ニ及フ
ハキヨシヲ申遣シケレハ叶ハシトヤ思ハ
レケン早速逃歸リケリ大坂落去以後尾州

ニ来リテ子孫アリ金森市之進ト云フ

○金森戦功并法印家督之事

濃州郡上城主稲葉右京同苗一徹齋石田方
ノルニ依テ遠藤但馬守慶隆金森出雲守可
重兩將ハ幡ノ城へ取掛テイトニ戦ノ所ニ
遠藤ハ軍ノ利ヲシテ引退クト云ヘトモ
金森ハ命ヲシマス乗越ク責入ケルニ
終ニ勝軍トシ成ニケリ此節味方討死ノ面
々ハ牛丸又右衛門田島太郎八吉田孫四郎
南部宗四郎安藤右兵衛今井平助馬場弥次

按スルニ慶長五年關ヶ原
内陣金森戦功在リ
ノ不記戦功分相ナラス可
堀ノ上ノ城或ハ八幡ノ
城トモ出ヒリ是ノ郡上
ハ幡ノ事ナリ故ニ
下俗アママリテ八幡ノ
城トモ云ヘリ

郎宇佐美内記伊藤備前栗原作十郎長屋甚
藏田能村助右衛門鈴木新平田能村孫惣曾
我平八上田左太郎等也又西殿右近同左門
同吉助平井孫四郎棚橋庄助伊藤權兵衛石
神久治飯沼源右衛門渡邊小平太是等ハ首
ヲ得テ高名ナ極ノタリ田島勝太佐久間五
左衛門垣見九右衛門葛西典右衛門等ハ先
登ニスミテ戦ヒシ手負ノ面ナリ惣シテ
討死手負ノ輩五十餘騎ト聞ユ其後大坂御
陣ノ時金森ノ手ハ生捕八人首八百計取ケ

ルトノ然ルニ慶長十三年申八月十二日法
印京都ニ於テ卒去セラレ金龍院殿ト号ス
此時法印ノ実子二歳ナリシヲ駿府ニ召メ
ホセラレ上有知一万八千石ヲ宛行ル、ト
云ヘトモ不幸六歳ニシテ早世セラレ去ニ
ヨツテ法印ヨリ附置ル、処ノ田臣肥田主
水島四郎兵衛池田圖書三人ニ千石宛ヲ下
シ置レラタニ御旗本ニ召出サルト云フ
并ニ金田三千石ハ法印ノ後室久昌院へ下
サレシカ是モ卒去ノ後ハ召上ラレケルト

按スルニ金法印後家
有ハ長光ト号シ澤州ト有
ハ長光ト号シ澤州ト有
二歳ノ実子ヲ金法印
飛州三万八千石ヲ賜ル
知金田二万五千石ヲ下
ノ後ハ実母ニ正三千石
ヲ下サレモナリ

ナリ出雲守可重ハ大坂落城御歸陣ノ御京
都祇園ニ於テ卒去セラル依テ可重ノ三男
駿府ニ奉仕セラレシ重頼ハ家督無相違仰
付ラレ是ヲ出雲守重頼ト云フ法印ナラヒ
ニ閑公ノ軍功擧テカソヘカタシ小田原街
陣ノ供ニハ田島勝太根尾勝三郎遠藤頼母
大塚左吉岩田弥助大野捨左衛門今井理左
衛門石徹白彦右衛門笹俣五郎左衛門等ヲ
初メ騎馬ノ勇士凡三百五十餘騎也中古飛
州治乱其アラマレヲ書記スモノ是ナリ

飛州軍覽記終

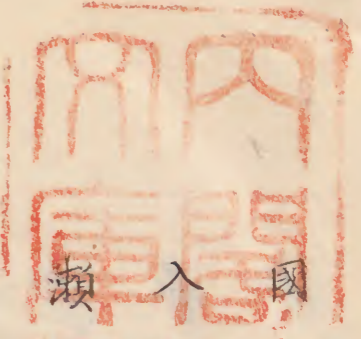
按スルニ此書ハ事宣ノ
不同年代ノ異單覽
記ニ寺ノ前卷ノ首書
併セ見ルニ

飛州千光寺記

竊尋袈裟山千光寺開闢人皇一十七代仁德
天皇立都難波四海波治万民歸德時東仙道
飛駟國大野郡小八賀鄉出羽平山上有窟石
巖苔滑万木生茂異于他也從此窟宿儺出現
御長十八丈一頭兩面四肘兩脚足一指前後出
也着甲冑帶兵杖一手結印是則救世觀音化
身也野人村老見之恐怖欲遠境逃散于時宿
儺示衆曰我是依有佛法守護王法契約當此
代出現全不可違背速可致宮仕由依仰人氏

奉親近也于時為草創千光寺平均山上之土地處得一石櫃開石蓋見之在紺紙金泥妙法華經一部八卷二十五帖袈裟一帖闍浮檀金指量千手觀音一體故山号袈裟寺號千光然飛驒國鬼神令出現由流布天下達叡聞故為鬼王退治官軍至濃州癸向雖此地澤山幽谷道斷橋危而輒依難攻入官軍空歸洛重有公卿僉議雄仁被下向此時宿禰美濃國立牒使曰吾是依有佛法守護王法契約當此時出現往昔於靈山釋迦說法會座仁德宿禰俱為

警固于時佛曰仁德者末代正生日本國王位宿禰同時節御即位大夏可致傳授云雄仁亦有彼通仍抱雄仁於當國大野郡位山被傳授畢則御笏木作副奉進上也其例于今無闕如代代天子自位山被召笏木蓋此謂狀自中古成真言秘密道場一山十三坊建立一基塔婆奉安置金胎兩部曼陀羅千手千眼二十八部衆藥師十二神尊容修護摩捧卷數奉祈天長地久御願圓滿至末寺末社不遑勝計雖經末來永々爭可有荒廢一山大衆學侶教侶當無



他事係所人王百七代正親町院御治世當
 國々司三木大和守直頼嫡孫義頼長男自綱
 入道久菴依政道辛親類骨肉成怨雖于時廣
 瀬山城守宗城屬于甲州武田對久菴企逆心
 依之信玄振猛威永祿七年甲子七月十八日
 發向當國到千光寺謀送曰國司自綱搆無道
 骨肉家人皆以惡之乘弊欲攻伐之大衆此節
 存忠義者可免刑罰不與速可破却云云一山
 衆徒僉議曰夫吾山者祈帝城實祚鎮四海逆
 浪平自國怨敵古今既度々也見捨大檀那先

途爭與無道信玄衆議一同而則追放使節武
 田大怒以大勢圍之一山大衆烏越峯搆城郭
 楯篋頓相觸國中乞後攻勢所皆捨兼已館燕
 一騎加勢篋城之大衆等結忍辱慈悲衣袖懸
 肩提惡魔降伏劔戟走菟向敵身命不惜防戰
 中實光院玄海普門院亮輝吉祥院專順說法
 院果海不動院亮延蓮花坊是等射出弓鏃炮
 楯物具不恠寄手山下支而不得近付雖送數
 日既城中矢種玉藥盡助兵不馳加楯篋宗徒
 或手負或討死武士弥勢重晝夜旦暮被攻詰

終衆徒悉敗走。則乱入、而懸火、魔風吹来、一山
堂塔院、寺々各庵獨住、僧房一時炎滅。嗚呼
悲哉。數萬經論聖教、代之勅筆、御願文釋迦
御袈裟金泥、法華經闍浮檀金之千手觀音當
此時成灰燼。古人曰、利人天必福之、凶人天必
殃之。云々著眼看之。武田之一家、為信忠卿被
滅畢、此節死殘僧徒、宰浪他國。其中權大僧都
法印玄海、昆弟大僧都亮輝兄弟二人、打越信
州、經二十餘年、頃四海大乱、因主招自滅。越
飛州、為縣弑父討子、凶兄弟、欲棄其一跡、因司

久菴謀濃氣健、森大隅守塩屋筑前守東甲斐
守土川肥後守此等之輩、為大將日、夜、合
戰無止時。中塩屋筑前守越中新川郡打隨、梅
尾猿倉、搆城郭、數十年令住居所。國侍以越後、
謙信加勢、攻之於城中、筑前守討死、行年六十
二歲。如斯雖振武威、運命斬傾、一族令埋没先
表既顯、昔平清盛之時、三郎右衛門景綱從出
當國、以來因士長、止出仕、剽劫隣國、荒城郡高
原郷、江馬小四郎時威領之、益田郡搆城郭、三
木大和守直賴在城、大野郡、鍋山豊後守廣瀬

右近將監小田川城前，因司姊小路宰相明山
杉寄城小島時光白川内，島氏埋石城，晝夜
兵出，各相戰，如古異朝戰，因七雄，荷鉞，裹糧，無
隙，備尋，濫觴，彼江馬，先祖者桓武天皇平氏，苗
裔修理大夫經盛卿，妾腹，出生也。平家滅亡，後
彼妾抱一孤，嫁北條時政，後子江馬小四郎輝
經，與北條義時不和，之間對北條家，欲成，雖故
為賴家卿，命被遠流，當因子孫相繼，領知高原，
此所左馬頭時盛，長男輝盛，器用骨柄，勝人，越
中國數箇所，切取中地，山拵，邑，鄣，川上，中勢，少

輔，被居，置誠，雖達武勇，不知仁義，血氣勇者也。
早為取家督，計父時盛，積惡，餘殃，可有今一家，
輩猜之，此家相傳，重宝小島，太刀，青山，琵琶，清
盛公，赤旗，敷盛，纒其外，平家累代，重物，雖有數
多滅亡，至時係，企惡行也。三木，聞之，為誅，無道，
自綱卒，三千餘騎，欲高原，打入，輝盛，三千餘兵，
蒐出，合戰，自綱不，依引，退所江馬，競，未荒
城，大坂，打越，於八日，所相戰，所小島時光，加勢，
自綱，終日，戰，屈江馬勢，追散，四角，八方，輝盛，終
討死，前，因司，士卒，自綱，與力，牛丸，又右衛門，取

首貫鋒見之川上繼殿助同左衛門尉和尔以
下之兵双枕自害哀哉後釋經數十代携弓箭
施武威骸骨未乾名先立消失爰安国寺别源
長老志依為大檀那則嘗葬禮規式抑此安国
寺七堂伽藍名跡七間四面輪藏納五部大乘
經東西衆寮搜五燈錄察直指人心祖師心印
開山來歷行狀未尋決建武年中足利尊氏將
軍為四海武將天下一統後遠国未穩南方朝
敵動襲來九重是以法力不靜豈有太平期且
為予元弘建武亡魂為天下靜謐祈禱改龜山

殿舊跡於嵯峨立天龍寺則命諸国七道国
靈地建立一院安国寺受夢相国師宗泐臨濟
教法達磨宗為末寺從是自綱威強大掠領国
中則自綱於松倉山構城館国中人民碎骨苦
肩有數年城家成就石壁甚高集大石成堤誠
城構雖過分智以似淺彼三木先祖江州佐
木之同姓多賀太郎子孫也數代居住當国以
武立權威前国司妙小路殿家臣牛丸左馬允
渡邊筑後守同主水正山賀新兵衛此等被背
出與力国司下向越中爰後勝帶刀離一家重

主從道致御供終於戰場墜命果因茲三木義
賴致上浴達。叡聞望因司号有公卿會議曰
彼父大和守直賴察奉御馬号辨慶密毛無及
駁足也在京之間成長橋局之所緣下因後儲
義賴依此好義賴被補所望畢其子自綱相繼
称因司出家之後号久菴舍弟右衛門督頭綱
為鍋山豊後守養子于時先亡江馬一黨前因
司從類背久菴命指箆所結句舍弟鍋山頭
細嫡男信綱廣瀨宗城企叛逆自綱大怒信綱
呼松倉城害之鍋山差遣長瀨甚平乍然一人

忍入敵城得利事如何思處安計之頓掛火
廣瀨山城守舍弟兵庫頭宗真見之難遁思案
乞降開渡一城引退所自細後不顧禍討取宗
城移高堂城一男秀綱渡家督預鍋山城三男
基賴為小島柳御所時光養子預杉寄城漸雖
一因平均諸人憤深親類恨多悲乎討舍弟興
長男奪其地豈善政干時天下武將右大臣平
信長公遠尋先祖平清盛公二十代後胤織田
備後入道桃巖嫡男也其頃号上總介畿内近
因中国西因討平威凌天地時幕下伺公候人

濃州住人金森五郎八源長近後兵部卿号素
玄法印討取越前国大野郡暨在郡遥闻当国
無正體討無道救民致武所也以自力欲討取
先以當国繪圖窺案内所鍋山豊後守舍弟平
野左近被憎久菴約廣瀬兵庫頭宗真共至大
野其外白川住人内島兵庫助氏理家人川尻
備中守氏信蒙一家猜因牢人越前金森近付
之且暮致謀略愛美濃国郡上兩遠藤於長滝
括城為押飛州廣瀬鍋山川尻以下之軍兵置
置依之江馬左馬助牛丸又右衛門等宗徒兵

不招馳集已欲飛州打入所天正十二稔六月
三日平信長公為明智被滅天下如闇夜依此
騷動因全叛逆於越中佐内藏助振武威
引合飛州不致上洛依之時武將羽柴銃前守
豊臣秀吉公後号從一位右大臣關白有御動
座金森属彼手在陣無程一揆靜謐所兼約束
牛丸廣瀬川尻江馬鍋山以當国指圖啟案内
故天正十五年八月上旬越飛兩境自猪谷打
入頓因中襲来此日小島時光開城逐電久菴
大驚楯篋高堂城雖防戰一騎交圍勢吞曰天

氣對上方官軍數千騎爭可叶一時被搥破落
行勢散、逃隱山林久菴威盡降長近軍口脫
甲助于命故未向敵秀綱去鍋山城趣信州所
於大野川暗、被討鄉人浮名流長河先年伯
父賴綱討曰果難道者哉法印一因攻伏被上
浴為目代養子長屋左近將監嫡孫前出雲守
源可重其頃喜藏丸為大將氏族長屋一黨遠
藤西脇根尾田島日根野大塚因侍牛九河尻
江馬鍋山越前大野住人篠保石徹白河合中
島松山時枝葛西六野馬場阿波賀山内此等、

宗徒為兵都合千餘騎令在因斯所先亡餘黨
催一揆於山、谷、揚旗一宮神主入道三宅
廣瀨兵庫頭宗真為大將日、夜、排戰所上
方勢些不屈機、菴出、合戰荒手入替戰三
宅終討死頸被曝獄門妻子悉擗捕於鍋山麓
掛張付殘憂名未代哀成次第也當因一揆令
誅戮都鄙無其隱秀吉公聞召喜藏丸勵急被
召上預御感年未滿三十一而揚天下誠無比類
譽也其後法印在下因大野郡高山構城郭小
島分一跡宛給出雲守即小島山構城為法印

鷹狩見廼在所傳聞于光寺由來信心銘
肝有再興志於大衆者可加助成被下知殊北
方久昌院別被添志則前因司久菴旗下候人
多留當國屬金森家故命彼等依被成令條對
玄海亮輝二人被通案內因茲二人自信州令
歸國玄海者為國分寺住侶此因分寺者為千
光寺未寺立一基鷹塔雖安置醫王善逝數年
亂世堂舍殘礎庭軒深成鞠棲漸結庵室奉祈
園土泰平所素玄法印被加修理藥師堂迴廊
如形造立扱亮輝專順登山尋住來跡苔生露

深野千棲荒大日尊容之靈地二天双光石苑
松柏茂魚跡情觀之誠哉闢淨堅固五百年
佛法俱消息戰淚深衣無情松風副哀慟聲
角伐木薙草而造立一字堂舍結篠葺菴令住
居急致上浴四條大佛師對談前立二十八部
衆令造立二天十三佛成寺形畢昔於因中所
立庄園多被寄附別小八賀郷坊方下保以下
村為修理職利回祿以來依魚其沙汰終取
立堂舍檐願有如魚也夫白山人皇四十回代
元正天皇御宇養老年中依有瑞夢泰朝大

師開闢三峯大汝大御前別山也三國無雙名山靈驗殊勝地也跨三箇國越前加賀飛騨是也然美濃國長滝寺若為白山末寺繁昌盛于今是則千光寺末流也本寺衰微末寺甚榮盛頗千光寺似無面目愚僧歎之欲訴素玄法印雖然彼法印依為太閤秀吉公無雙寵臣平生被在京不住自國終慶長十三年八月十三日於洛陽逝去往年八十三歲息出雲守源可重得國讓從古川城被移高山府或吾寺遊覽之砌述其意可重悅喜不斜早謀送長滝寺如前

三可隨千光寺若有猶豫義以公方之御下知急催促云云矣玄海老耆旅行雖堪悲且為佛法興隆且為國為世為人凌險難觸催一山所一寺宿老悉以不違背如右可隨後應詔仍立歸言上刺史雖然事大儀之餘首尾不調就公私紛多處天平錯亂大坂一戰秀賴公滅亡諸軍凱陣後於平安城源可重病死于時慶長二十稔閏六月三日春秋五十八歲保國七年籙所向靡無遮留無常使為前法印菩提所於紫野建一院金龍院是也可重葬同寺時長老松

岳紹長引導之此時家臣山藏繼殿助森右衛
門九郎二人為冥途供切追腹異于他高名也
依此紛纒無其沙汰是偏千光寺斷滅基欽予
就老菴因分寺讓與大阿闍梨尊雄隱居觀智
院幽閉閑居窓前湛瑜伽法水澄三密月去累
代令調進笏木中絶之條當今御代再繼絶
興廢調御笏木示尊雄阿闍梨以傳奏廣橋大
納言殿捧之法孫沙門勿令懈怠愚僧兄弟為
佛法與隆苦身心數十年亮輝於本山普門院
遷化慶長二十年正月十五日往季七十一歲

亮輝往生之後吉祥院專順當季八十八難面
存命獨住山朝三暮四之煙幽衰分野也相構
我法孫之沙門令達歡聞許公武以十方檀
那助成於今建立一字堂舍一基塔婆者開山
宿離菩薩中與亮輝僧都追善專佛法昌之三
法無曇天下泰平無所疑愚僧春秋八十三歲
今既明日不知老身之今日暮間待計書不盡
詞不盡心笑穴賢勿令輕慢右一卷
予從天文昔至元和今集所令見聞雜談於隱
遁閑暇雪中徒然書綴竊梓知音懷然骨肉難

入火土亡拾華跡留慈尊出世之曉願以書
寫善面見弥陀佛即滅無量罪歸入阿字文
于時元和七年酉季十一月吉日玄海誌之

飛州千光寺記終

○飛州三澤記

夫飛駝國大野郡一宮水無大明神ハ往昔七
社ニテ御本社一ノ宮ハ御歲神也末社ハ熊
野宮天満宮稻荷宮富士權現兎權現箭太神
ノ社其外本地堂鐘樓拜殿神樂殿各イカ十
ラハテ綺羅天ニ釋キヌ是建治年中藤原朝
高朝臣ノ御造營國中第一ノ大社タリ神領
ハ一ノ宮郷久々野御代々ノ社家十二人就
中永正ノ頃ニ至ツテ御宮守一ノ宮民部少
輔長綱ト号ス神祠ノカタハテ坪ノ内ト云

按此書軍見記
ノ説同前卷ノ書
ニ解見ハレ

ノ所ニ屋形ヲ構エテ居之長綱嫡男一宮右
衛門大夫國綱ハ則テ永祿元龜ノ頃三木右
京大夫自綱ニ縁ヲ組テ妹尊トナル是ヨリ
家名ヲ改メ三木刑部大夫國綱ト云後ニ入
道シテ三澤ト号ス天正ノ初ニ至リ片野石
浦無數河山ノ口等ヲ加ヘ領シテ天正五丁
丑歲山下ノ城ヲ築キ居之神職ヲ家臣森某
ニ譲リ其身ハ全ク武門ニ入テ近郷ニ其威
ヲ振ヒケリ其頃國中ノ士分ニ領ストイ
ヘトモ三木自綱ヲモツテ本所ト定メ守レ

リ然ルニ自綱天正七卯四月高原ノ江馬ヲ
討亡シテヨリハ弥威勢ヲ國內ニ振ヒ松倉
ニ居城ヲ築キ住ス又國司ニ任シテ入道ノ
後ハ久菴トシ号シケル然ル所ニ運頓クハ
キ先表ニヤ天正十年ニ至リテ頻ニ金森家
討入ナリト專風説シテ上下男女ノ口遊ニ
モ久菴様ハ鶉テハガル金森掃ハ小鷹テハ
ハル追ヒ箆ラレテ音ヲ留ルトゾ謠ヒケル
叔モ金森五郎八長近入道法印同嫡男喜三
可重ハ秀吉公ヨリ當國拜領シ天正十三年

乙酉八月二日當國ニ討入ケレバ三木久菴
廣瀬高堂ノ城ニ於テ防戦ストイヘトモ叶
ハスレテ終ニ城ヲ明渡シテ濃州郡上長滝
ニ落行ケリ天正十五年
京ニテ病死本城松倉ニハ藤瀬新威
ト云者返リ忠ヲイタシ本丸ニ火ヲ掛ルニ
ヨリ忽落城ス自細カ息秀細城ヲ遁レ出タ
リシカ信州大根川ニテ害セラレ畢ス是ヨ
長近古川蛤ノ城ヨリ鍋山ニ移リ同八月十
六日一宮へ出馬ス先手ハ美濃ノ梶田衆ナ
リ特ニ三澤カ家士天木山下芋郷民ヲ語ラ

ヒテ半途ニ出テ銃炮ヲ以テ暫ク防クト云
ヘトモ三澤如何思ヒケニ一鎗モ合ヒス山
下ノ城ヲモ明テ山ノ口或ハ河内ノ方へ散
ルニ引退シカハ右兩士ヲ始ノ郷民芋モ思
ヒニニ落行ス長近禪入屋敷ニ馬ヲ立テ
レ軍士勝鬪ヲ作テ山下ノ城ヲ乗ツ取リケ
リ則可重是ニ在城ヒラレ長近ハ鍋山ニ歸
城也角テ三澤カ行衛ヲクツ子ヘキ旨觸ケ
ルニ念ナクモ翌十七日ニ山ノ口村ニ於テ
是ヲ生捕リ鍋山へ引渡ス其外女子小兒芋

ハ所ニ逃去リテ深ク隠ル中ニモ三澤カ
息女辯ノ君ト云フハ乳母ヲキヤチト云フ
老女三澤ノ重代ナル秋廣ノ刀ヲ指シ辯女
ヲトモナヒ人目ヲ忍ヒテ草深キ谷ニ入リ
木ノ葉茂レル嶺ヲ越シ夜ニ入テ漸ト河内
大坊ト云フ所ニ至リテ百姓弥市ト云フ者
ヲ頼ミテ入ケルカ弥市心アルモノニテ深
ク是ヲイタワリ翌日ニナリシカハ衣類ナ
トノ露ニ濡タリシヲマカテ竿ニ掛テ乾シ
置タリシヲ追手ノ諸士ノ川向ヨリ是ヲ見

付テ不審ナレシ我先ニト川ヲ越シテ大坊
へ押渡ル弥市ハ是ヲ見テ息女ナラヒニ乳
母ノ女ヲ隠へキヤウナシ詮方ナクテ煮テ
家ノ内ニ大根ヲ貯へ置シ穴アリ是ニ二人
ヲ隠シケリ間モナノ追手ノ輩入来リテ色
ニ攻問ト云ハトモ弥市聊モ知スト陳ス
其時追人ノイハク落人ノ有證據ニハ汝等
カ所持セサル衣類ヲ表ニ置タリ此上ハ陳
ニ及ハス出スヘシ若シ出サスニ於テハ家
ニ火ヲ掛ヘシト云フ依テ是非ナク深ク隠

ヒレ所ヨリ二人ヲ出シ渡シケル諸士是ヲ
請取スナハチ鍋山ノ城ニ遣シケリ尤其頃
ハ益田郡ノ中イマタ平治ニス故ニ聞次ノ
為トシテ足輕大将二頭ヲ尾崎ト云所ニ附
置レケルト也扱又宮村ノ内間坂ニ彦兵衛
ト云フ百姓アリ彼モノツノ人思フマウ
人ハトモアレ我ハ御城へ参ラント思ヒ腰
ニ鎌スガヒクルマニテ山下ノ城へソ登
リケリ番ノ者トモ如何ナル者ソト問彼者
申スマウ此向ヒナル間坂ト申所ノ者ニテ

候御見舞ノ為ニ是迄忝上仕ルト申ケレハ
其趣可重聞給ヒテ大ニ感シラレ則居間
近ク召出シ汝カ名ハ何ト尋テ彦兵衛ト
申ケル時ニ此邊ノ百姓共ハ何方ニ居ルソ
ト在ケレハ謹テ何モ山小屋ニ逃竈リ居候
ト申ス如何シテ其百姓共ナハ村里ニ返附
ニト在ケレハ彦兵衛申ケルハ我等方ヨリ
殿様ノ御免ト申遣候ハ、早速皆ニ吾家ニ
ニ罷歸ルヘキト申ケル故ニ其通ニ可相計
旨ニテ扱酒ヲト給ハリテ我屋ニカヘリ右

旨趣ヲ申會メ使テ遣シカハ何レモ悦ビ
皆々我屋ニカヘリケリ其後三澤カ領分七
ケ村ノ者共長迄ハ訴詔申ケルハ三澤殿法
躰ノ身其上我々カ主君ノ儀ニ候上ハ御慈
悲ヲ加ヘテ我等ニ御預ケ被下ナハ難有
可奉存ヨシ申ケル長迄聞ワケラレテ村氏
ノ願ニ任セテ免サレシカハ三澤ヲ請取久
野村ノ草菴ニ移シ念頃ニ馳走申ケリ息
女辨ノ君ハ人質ノ為ニマ鍋山ノ城ニ留メ
テ妾トセラレケルトナリ儲暫ハ事静リタ

リシニ土民ノ中ニテ頭立タルモノ共彼草
庵ニ参リ集リテ申ケルハ吾等昨日今日迄
主君ト崇メ奉ル所ニ今引替テ五郎八入
道殿ノ大宇トナス莫如何計無念至極ナリ
因茲我等存立シハ因中ハ廻文ヲ出シ君ヲ
大将ト定メテ一揆ヲ起スモノナラハ五郎
八殿ヲ討取莫紫ノ内也是非思召立タマハ
ト寄々進メケル程ニ三澤止事ヲ得ス領掌
シ何レモ能ク相計フハト言ケレハ夫ヨリ
所々ニ寄合々評議ヲ究メ廻文ヲ認メケ

リ其趣ハ来ル閏八月十六日國中一統セシノ一ノ
宮三澤殿ヲ大将トシ金森ヲ可討捕者也ト悉
ノ相認ノ百姓三人ヲ撰ミテ乞食或ハ坊主ノ如ク
ニ振ヘ立彼廻文ヲ持テ國中ヲ語ルニ則テ國中
ノ百姓共皆一味同心ヲソ成シニケリ然ト
モ此旨城内ヘハ知レカリケリ数日ヲ經テ
閏八月十四日ノ晩方ニ至リ其旨聞ヘク
レカハ翌十五日ノ朝同坂彦兵衛ヲ城内ニ
呼ヨセテ役人申ケルハ其方家内ニテ心安
キ家来二人ニ松明一荷ヲ持テ今暮方ニ差

越エシ其者共ニ位山通りノ案内セサセニ
トソ申付ケル彦兵衛畏リテ其如ク支度仕
リ暮方ニ城中ヘ下男ヲ召ソテ參上其様子
ヲ見ルニ侍兩人鑓ヲ着シ馬ニ乗りテ出行
タリ扱夜中ニ尾崎ニ至リ前ヨリ聞次ニ
附置シ足輕大将ニ頭ヲ同道シテ夜明方ニ
城内ニソ歸ラレケリ是ハ一揆等ニ取籠カ
セテハ如何ナリト如此也于時閏八月十六
日甲申日午ノ刻ヨリ宮山下ノ百姓共熊ノ
搦ニ出立テ悉ク山内ニ入ル候ノ輩是ヲ

見付テ同日申ノ上刺ニ近付邊ノ家々ノ足
輕ヲ差遣シ土民ノ妻子ヲ生捕テ人質部屋
ニシテ入置シニ其暮方ニ一揆等百姓共大将
ナシニ猪突鎗猿打銃炮ヲ携ヘテ一身ヲ抛
攻カ、ル去共城中堅固ニシテ其甲斐モナ
カリシ所ニ戌ノ上刺城中ヨリ銃炮數十挺
打カクレハ一支モサ、ヘス一揆等悉ク敗
北セリ長近座鋪ノ椽ニ立タマヒ白旄ヲ以
テ真驀ニ進ムヘシムアリシカハ少モ不踏
上野迄追拂ノ夜中ノ長追無益ナリト味方

ヲ集メテ是ヲ見ルニ一人モ過ナク首數級
ヲ取テ諸卒黒岩ニテ勝鬨ヲ作りテ鍋山ノ
城ニシテ歸リケリ其夜ハ門々櫓ヲ堅ク守テ
已無別条克終ル扱山下ノ城ヘ同日暮方
ニ三津カ田領七ヶ村阿多野川上筋ノ百姓
都合五百余人久々野ニテ人数ヲ揃ヘ三津
入道ヲ大将トシ旗馬印ニハ暖簾古紙紙ナ
トヲ取然レ思ヒ、ニ指アケテ曳、声ヲ
出シ山下ノ城ニ押寄ル城中ニハ少モ不騒
暮時ヨリ丑ノ刻迄銃炮ヲ揃ヘ遠火ニ放テ

懸レカハ分野サナカラニ澤迄ニ飛カフ螢
ノ如レ折レモ十六夜ノ夏ナレハ鬼ノ河原
ハ其終ニ白晝ノ如クナリ時ニ一揆芋城ヨ
ノ二町下ナル林ニ火ヲ掛テ城内ヲ焼拂ヘ
レト評議シテ手ニ火ヲカケル城中ニモ
兼テ覺悟ノ夏ナレハ此方ヨリモ火ヲ付テ
林ヲハ忽ニ焼拂ヒシカハ鬼ノ川原ヘノ兵
道ハ然能クテ一揆ノ奴ハテ數百人忽ニ
討倒サレ是ニ御レテ兵ハ我ニ成リテ逃
行ハ夜モ斬レ明ハナレ十七日ノ卯ノ刻ニ

至ル三澤入道下知シテ二百人計一ノ宮ヘ
取込ラセ備テ立ニ兵出テ大手ト定メ待掛
レ所ニ鍋山ヨリ長近出馬アリ備ハ長蛇ナ
リ若宮ノ邊ニ金森家ノ大馬印白キ吹貫見
ユル上同レク山下ノ城ヨリモ縁熊付タル
金ノ圓座ノ小馬印ノ備ノ中程ヨリ跡ニ持
セ騎馬四五十馬ノ頭ヲ鷹行ニ列テ大墮寺
下ノ野ニ出テ鍋山勢ニ行向ヒ則兩將禪入
座鋪ニ旗ヲ立ラレ軍士ヲ以テ二手ニ分一
手ハ間坂ヨリ押寄一手ハ二門ニ責寄兩

備四五十間程宛ヲ隔テ鉄炮^合時ヲ移ス
処ニ一揆等大形一ノ宮ノ嶺ヲツクヒテ落
行殘卒計ル者數ヲ不知漸落殘ルモノ共
二三十ハカリ三澤ヲ守護シテ拜殿ニ引籠
ル処ニ問坂ノ寄手後ヨリ来ルヲ見テ坪ノ
内ニ逃行テ谷ヨリ山上ヲ越テ落行ケリ三
澤ハ片野ノ郷民三人ヲ左右ニシタカヘテ
鎗ヲ引提ニ王門ヨリ本陣ヲ目アケ真幕ニ
突テ出寄手ノ大勢ヲ散クニ突立ル問坂ノ
人數後ヨリ取結テ郷民二人ハ鉄炮ニテ打

倒シ一人ヲハ鎗ニテ突留ル大将三澤ハ槌
打小金^{後号}ト云フ者是ヲ計留ケル是三澤ヲ
生捕ニセン迪カク遠廻合ニセラントナリ
又其刻大幢寺ノ住僧人數二十計ヲ召連月
毛ノ馬ニ打乗テ久々野ノ方ニ逃行シテ兩
大将是ヲ三澤ト思ヒ追駈テ生捕ルヘシト
アリケレハ諸士我先ニト走ル所ニ可重ノ
足輕槌打弥藏大幢寺ノ家人ニ計ル猶諸卒
追テ山梨迄追駈シニ久々野ノ方ニ益田
筋ノ一揆五六百計出来リ追人ノ内杉山兵

助ト云侍小坂ノ溝上何某ト云ス者ニ鑿炮
ニテ討ル此躰ヲ見テ不思寄一揆ノ大勢ナ
レハ追人ノ兵士進兼テ山下へ引返人彼一
揆ノ者共ハ宮へ打越レ問坂ニ陣ヲ取ル兩
將如何思ハレケニ山下ノ城ヲラヒテ大懼
寺ヲ焼拂ヒ直ニ鍋山ノ城ニ歸ヲレケル長
近錦ノ陣羽織ヲ著シ底毛ナル馬ヲ来レシ
カ一揆ノ殘黨舟坂何某滝殿ト云フ所ニ忍
ヒ居テ鑿炮ヲ二三度々テ打掛ケレ共消シ
テ玉筒ノ不離トテリ角テ一揆等川ヲ隔テ

跡ヲ慕ヒ若宮迄ハ来リシカ片野へ出テ七
曲ヨリ阿多野日ノ見城ニ指竈リ一兩日
アリテ悉ク離散シケリ失タリケリ切三澤
カ首ヲハ鍋山ノ麓ニ於テ狹門ニカケ同ク
三澤カ娘辯女ヒ強敵ノ子ナルカ故ニ國中
見コリノ為ニトテ田島兵庫是ヲ下知シテ
五明村ニ於テ磔ニソシタリケル尚國中殘
黨ノ首共ヲ爰ニ取集メ首塚ヲソ築ヒケル
トナリ

飛州三澤記附録終

飛州志十二本明治七年五月校正共内海鉄
所讎校六頗多耳
中卯元起

